

若者世代における人生儀礼および年中行事の現状と
課題：認知度と経験率

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学大学院教育学領域 公開日: 2023-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 陽子, 高橋, 沙南, 鳥居, 優理香, 信國, 瑞希 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000168

若者世代における人生儀礼および年中行事の現状と課題

—認知度と経験率—

Current status and issues of life rituals and annual events among Japanese university students:
Recognition and experience rates

村上 陽子¹, 高橋 沙南², 鳥居 優理香³, 信國 瑞希¹

Yoko MURAKAMI, Shanan TAKAHASHI, Yurika TORII and Mizuki NOBUKUNI

(令和 5 年 11 月 30 日受理)

ABSTRACT

In Japan, there are events called life rituals and annual events. Life rituals are celebrations of milestones in life, such as children's growth, adulthood, and longevity, and include *Shichi-Go-San*, coming of age ceremonies, and longevity celebrations. Annual events are rituals that are performed at each turn of the year. Recently, life rituals and annual events have been simplified or even disappeared, and there are concerns about their inheritance. This study examined the attitudes and actual conditions regarding life rituals and annual events among university students. There were significant differences in recognition and experience rates for different types of life rituals. The recognition and experience rate for *Shichi-Go-San* was the highest compared to other life rituals. Since *Shichi-Go-San* is a well-known children's celebration, it is thought that the experience rate was high. The recognition and experience rates of birth and nurture rituals other than *Shichi-Go-San* were significantly lower. The students had a high desire to learn about the rituals of life, which were poorly recognized. These results suggest that it is necessary to enhance education on life rituals and promote cultural inheritance.

1. はじめに

近年、我が国の「和」の文化が世界的に注目を集めている。「和食；日本人の伝統的な食文化」（平成 25 年）¹⁾ や「和紙：日本の手漉和紙技術」（平成 26 年）²⁾、「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」（令和 2 年）³⁾ がユネスコ無形文化遺産に登録されている。我が国の伝統文化は、長い歴史の中で、先人たちの知恵や工夫により日本各地で独自に発展したものであり、次世代に伝承していくべき「わざ」が織り込まれている。

我が国の「和」の文化の形成や伝承の一翼を担ってきたものの一つに、人生儀礼・年中儀礼に代表されるハレの日の文化⁴⁾がある。人生儀礼（通過儀礼ともいう）とは、子どもの成長・成人・長寿など人生の節目の祝いであり、初宮参りや七五三、成人式、年祝いなどがある^{4) 5)}。

¹ 家政教育系列

² 静岡県立裾野高等学校

³ 沼津市立第五中学校

年中行事（歳時儀礼ともいう）とは、年間の折り目ごとに行われる儀礼⁶⁾である。移り行く四季を大切に、季節折々に行う祝いであり、初詣や節分、七夕などがある。人生儀礼や年中行事には、それぞれにまつわる食べ物や室礼、しきたりなどがある^{4) 5)}。人生儀礼や年中行事においては、地域で祭りを行ったり、伝統的な衣服を身につけたり、自然や神仏への感謝の思いや未来の幸福への強い願いが込められた料理を作ったり共食したりする⁷⁾。これらは各地域で伝承され、地域の連帯感を醸成するとともに、各地域の儀礼・行事などの伝統文化を形成・継承する機能を果たしてきた⁷⁾。家庭においては、親から子、子から孫へと家庭内で伝承されている。正月行事や盆行事など家庭で行われる行事は、家庭内の繋がりを強化する役割を有する。つまり、人生儀礼や年中行事は、日本人の生活様式すべてに関わる重要な文化といえる。

しかし、近年、少子高齢化や核家族化など、社会やライフスタイルの多様化などにより、人生儀礼や年中行事のあり方が大きく変容しており、その継承が危惧されている^{7) 8)}。地域、特に農山漁村においては、過疎化と高齢世代の増加、および、社会の変化に伴う価値観の変化などにより、人生儀礼や年中行事などの実施に関わる担い手（人・組織）の減少という課題が生じている⁸⁾。これに伴い、人生儀礼や年中行事が簡略化されたり、人生儀礼・年中行事自体が消滅したりするなど、その継承は喫緊の課題である。家庭においては、従来、人生儀礼や年中行事などの伝統文化は、親から子、孫へと日常生活の中で伝承されていた。しかし、家族のあり方や生活様式の変化などにより、家庭内における文化伝承機能は著しく低下・喪失しているのが現状である。加えて、若い世代における人生儀礼や年中行事に対する認知度や実施経験が低いことが報告されている^{9) 10)}。

こうした状況を受けて、小・中・高等学校学習指導要領では、伝統と文化の継承・発展・創造に関する教育の充実が求められている^{11) 12) 13)}。人生儀礼・年中行事と家庭科との関わりをみると、いずれも「衣」「食」「住」「家族」「消費」など、人の生活や人生に関わるものであることから、両者は密接に関連しているといえる。しかし、実際には、家庭科をはじめとする学校教育においては、人生儀礼や年中行事は十分に学習されていないという懸念すべき状況にある。

そこで本研究では、若者世代を対象として、人生儀礼と年中行事に関する意識と実態を把握することとした。人生儀礼や年中行事は生活や人生に深く関わるものであることから、本研究における成果を伝統文化の教材開発に繋げていく。これにより、伝統文化の理解・継承・創造の一助としたい。本稿では、人生儀礼と年中行事の認知度と経験率を中心に報告する。

2. 方法

(1) 調査対象および調査方法

大学生における人生儀礼および年中行事に対する意識と実態について検討した。調査対象はS大学教育学部学生1年生とし、内容の異なる質問紙調査（無記名自記式）を2回実施した。

1回目の調査は、人生儀礼と年中行事全般に関すること（2016年4月、313名）、2回目の調査は、年中行事のうち、節句に関することに着目した（2016年10月、229名）。回答は、選択式（一部自由記述）とした。両調査の有効回収率・有効回答率は、いずれも100%であった。

1回目の調査は、人生儀礼と年中行事全般に関することであり、人生儀礼については「お食い初め」や「七五三」「年祝い」など、年中行事については「初詣」や「節分」などについて、各儀礼・行事の名前の認知度、実施の有無や実施頻度などを調査した。

2回目の調査では、年中行事、特に節句に着目してその詳細を検討した。調査の内容は、各

表1 調査対象者の出身県

地区 区分	県	人数			%		
		全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)	全体 (n=313)	男子 (n=144)	女子 (n=169)
中部	静岡	221	91	130	70.6	63.2	76.9
	愛知	23	14	9	7.3	9.7	5.3
	岐阜	5	3	2	1.6	2.1	1.2
	山梨	10	8	2	3.2	5.6	1.2
	長野	5	4	1	1.6	2.8	0.6
近畿	三重	5	3	2	1.6	2.1	1.2
	京都	2	0	2	0.6	0	1.2
他	その他	42	21	21	13.4	14.6	12.4

節句の実施状況や各行事に関わる道具の保有率やその種類、祝い方などである。また、人生儀礼や年中行事は、地域において実施内容（実施時期や対象者の年齢や性別、祝い方など）が異なることから、調査対象者の属性に関する質問項目を設け、選択肢の中から回答してもらった。調査対象者の出身地の一覧を表1に示す。

得られたデータは、 χ^2 検定、マン・ホイットニーのU検定などにより、分析を行った。

（2）調査項目および調査内容

1) 「人生儀礼・通過儀礼・年中行事・五節句」という言葉に対する認知度

「人生儀礼」「通過儀礼」「年中行事」「五節句」という言葉の認知度を検討した。それぞれの言葉について「内容をきちんと説明できる、内容を大体説明できる、名前だけ聞いたことがある、聞いたことがない」の選択肢の中から1つ選択してもらった。「内容をきちんと説明できる、内容を大体説明できる、名前だけ聞いたことがある」を認知群、「聞いたことがない」を非認知群として分析した。また、認知群に対して、その内容を自由記述にて説明してもらった。

2) 各種人生儀礼と年中行事の認知度と実施経験（経験率）の関係

人生儀礼と年中行事について、具体的に名称を挙げて「聞いたことがあるもの」「経験があるもの」を選択してもらい、認知度と実施経験の有無（経験率）を検討した。「聞いたことがある」と回答した人（認知群）の割合を認知度、「経験したことがある」と回答した者の割合を経験率として分析した（複数回答）。人生儀礼は「三日祝い、お七夜、お食い初め、初正月、初誕生、七五三、十三参り、年祝い」、年中行事は「初詣、人日の節句、節分、上巳の節句（桃の節句）、端午の節句、七夕の節句、重陽の節句、中秋の名月」を選択肢として提示した。尚、人生儀礼のうち、「成人式」は、調査対象者の中に年齢的に未実施の者（未成年者）が含まれていることや、予備調査において認知度100%であったことから、上記人生儀礼とは別に調査項目を設けた。尚、年祝いは長寿の祝いの儀礼であることから、家族や親戚などの祝いに参加した経験があれば「実施経験あり」として分析した。年中行事は、一度でも経験したことがある場合は「実施経験あり」とした。また、人生儀礼については「将来、自分の子どもにも行いたいと思う人生儀礼」を選択してもらい（複数回答）、実施意欲について検討した。

3. 結果および考察

(1) 「人生儀礼」「通過儀礼」「年中行事」「五節句」という言葉の認知度

「人生儀礼・通過儀礼・年中行事・五節句」という言葉について、認知度を検討した。

1) 人生儀礼と通過儀礼

人生儀礼と通過儀礼は、「人が一生のうちで必ず通過し、または通過させられる儀礼」²⁰⁾と定義されることから、一般に同義語として用いられる。両者を比較したところ、認知度に顕著な相違が見られ、人生儀礼は通過儀礼に比べて認知群が低く ($p < 0.01$)、過半数が「聞いたことがない」と回答していた (図1)。認知群の中で最も多い回答を見ると、人生儀礼は「名前だけ聞いたことがある」 (約35%)、通過儀礼は「内容を大体説明できる」 (約47%) であり、認知度のみならず、理解度においても両者の間で有意な相違が見られた。

上記結果について、調査対象者が通過儀礼の内容を理解しているのであれば、通過儀礼と人生儀礼が同義であることも理解しており、両者の間に相違は生じないと考えられる。しかし、実際は相違があったことから、通過儀礼に対する理解は十分ではないといえる。

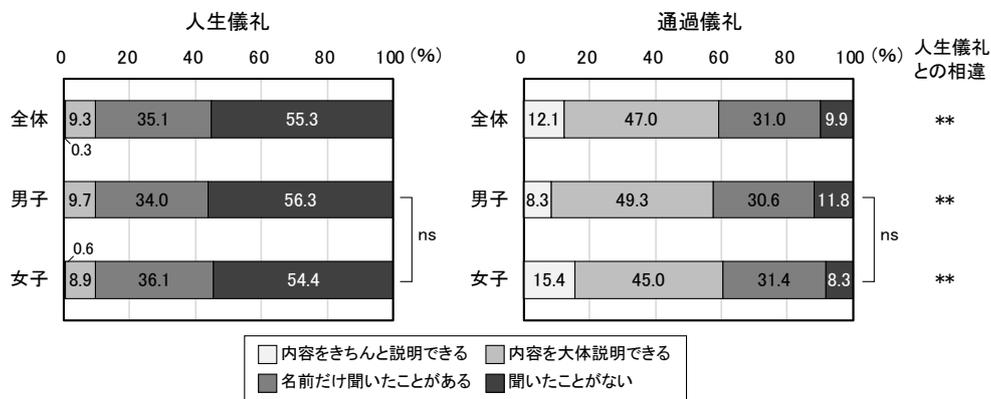


図1 「人生儀礼」「通過儀礼」という言葉の認知度

「人生儀礼」「通過儀礼」という言葉の認知度について調査した (男子144人、女子169人)。男女間の有意差、および、「人生儀礼」と「通過儀礼」の間の有意差は、マン・ホイットニーのU検定を用いた (* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, ns: not significant)。後者は、「通過儀礼」のバーの横に記した。

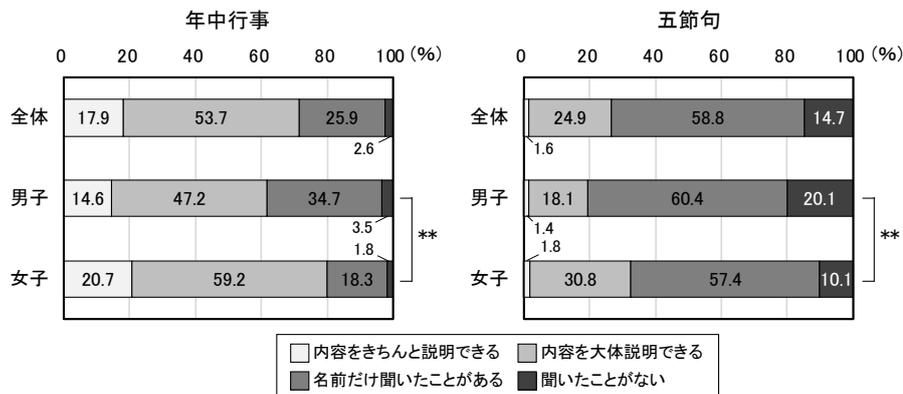


図2 「年中行事」「五節句」という言葉の認知度

「年中行事」「五節句」という言葉の認知度について調査した (男子144人、女子169人)。男女間の有意差は、マン・ホイットニーのU検定を用いた (* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, ns: not significant)。

通過儀礼が人生儀礼よりも認知度が高かったのは、言葉の印象によるものと考えられる。これを明らかにするために、「人生儀礼」と「通過儀礼」の言葉から受ける印象を自由記述で答えてもらった。その結果、儀礼に対して「人生」という言葉が組み合わさった場合、誕生から死に至るまで「人生全般」に関わる「儀礼全て」という印象を受けること、そこから感じられる時間軸は途切れることなく「連続」しており、「多種多様」な儀礼が「古来のしきたり」に則り、「種々の手続き」を経て「厳か」に行われている印象を受ける、という意見が見られた。こうした印象があるため、「人生儀礼の全ては分からない」「内容を答えられない」ということであった。これに対して、「通過」という言葉は、「人生のどこかを通過する際に一過的に行われる儀礼」であり、七五三や成人式など「一瞬（一日）」で終わるもの、または「単発的」なものという印象を受けるといった意見が見られた。

これらのことから、大学生は、通過儀礼は人生儀礼に比べて「厳粛さ」や「煩雑さ」「複雑さ」「種類の多さ」を感じにくいこと、具体的な儀礼をイメージしやすいこと、イメージした儀礼に対しては何らかの知識を持っているか、あるいは経験したことがあるため、人生儀礼よりも認知度・理解度が高かったと思われる。

2) 年中行事と五節句

年中行事の認知度は、人生儀礼や通過儀礼に比べて有意に高く ($p < 0.01$, 男子のみ有意差なし), 95%を超えていた (図2)。

年中行事の認知度が高かったのは、年中行事は毎年必ず巡ってくるものであり、1年の中で行われる行事の種類も多いためと考えられる。

我が国の重要な年中行事の一つに五節句がある。五節句(人日:1月7日, 上巳:3月3日, 端午:5月5日, 七夕:7月7日, 重陽:9月9日)は、中国の唐の時代に定められたもので、奇数と奇数が重なることを尊ぶ陰陽説から来ている^{6) 21)}。節句は、季節の変わり目である節日(せちにち), 節会(せちえ), 節供(せつく)ともいう²¹⁾。節句の「節(せつ)」とは、唐時代の中国の暦法で定められた季節の変わり目のことであり、これと日本の農耕社会の風習が結びついて、定められた日に宮中で邪気を祓う「節会」と呼ばれる宴会が開かれ、それが「節句」となったとされる^{6) 21)}。季節の移り変わりを大切にする日本人にとって、伝統的な年中行事を祝う季節の節目となる²¹⁾。そこで、「五節句」という言葉の認知度を検討した。

その結果、「名前だけ聞いたことがある」が全体・男子・女子全てにおいて約6割を占めており、内容の理解が不十分であることが示唆された(図2)。

上述したように、五節句の認知度を他の言葉の認知度と比較すると、人生儀礼より高かったが、通過儀礼や年中行事と比べて有意に低かった ($p < 0.01$)。この理由の程度を把握するために、「節句」についての認知度を追加調査するとともに、自由記述により両者の印象の違いを質問した。その結果を図3に示す。「節句」の認知度は、五節句に比べて「内容をきちんと説明できる」と「内容を大体説明できる」の割合が増加した ($p < 0.01$)。また、自由記述の結果から、以下2つの要因が推測された。

第一に、五節句を、節句とは別の言葉と捉えたためである。「節句」はよく耳にする言葉であるが、『五節句』のように、既知の言葉(節句)が別の言葉(数字:五)で修飾されることにより、「既知のもの(節句)とは内容などが異なる言葉」と考えたことが挙げられる。

第二に、具体性を求められたためである。調査対象者は、「上巳の節句(桃の節句)」と「端

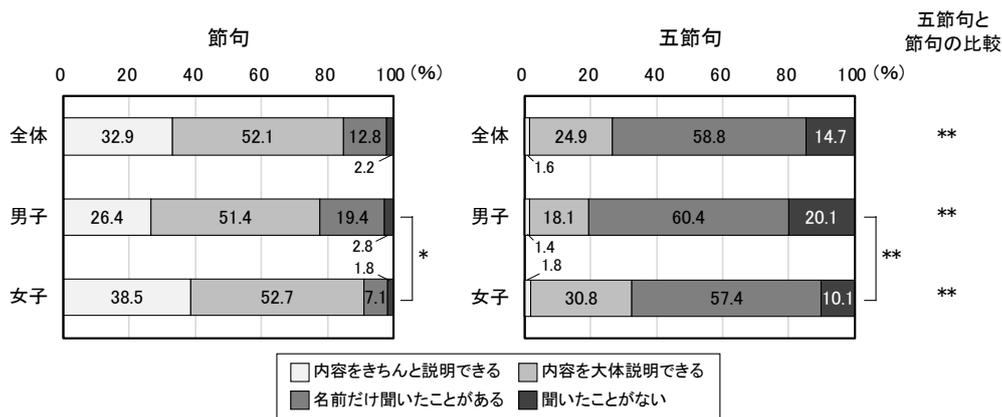


図3 「節句」と「五節句」の認知度の比較

「節句」と「五節句」という言葉の認知度を比較した(男子144人、女子169人)。男女間の有意差は、マン・ホイットニーのU検定を用いた(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)。

午の節句」のことは知っており、これらについては「内容が説明できる」状態にある。一方、「『五』節句」のように、節句の数を限定された場合、他の3つが具体的に何を指すのか分からず、「内容を説明できない」と考え、「名前だけ聞いたことがある」と回答する人が多かったと考えられる。五節句は、日本人が大切に育んできた風習であり、比較的馴染み深い年中行事であることから、理解度も高いと予想していたが、大学生においては理解が不十分であることが示唆された。

また、五節句は、年中行事であると同時に、人生儀礼の一つに位置付けられるものもある。赤ちゃんが生まれて初めて迎える節句のことを「初節句」²²⁾と呼び、それ以降の節句よりも盛大に祝い、子どもの健やかな成長を祈る。女兒なら上巳の節句、男児なら端午の節句に行く。初節句は一生に一度のお祝い、地方によっては「初子の初節句」といって第一子の初節句だけを特別に行う風習もある²²⁾。初節句の際、上巳の節句には雛人形、端午の節句には五月人形、兜、鯉のぼりを飾り、祖父母などの親戚を招いてお祝いの膳を囲む。初節句では、女兒は被布や着物、男児は陣羽織などの晴れ着を着る²²⁾。つまり、初誕生を迎える女兒・男児においては重要な人生儀礼ともなる。五節句に対する認知度の低さは、人生儀礼や年中行事の形骸化、あるいは衰退を表しているともいえる。これら人生儀礼・年中行事の謂れや意味、背景などに対する知識の習得が必要といえる。

(2) 代表的な「人生儀礼」に対する認知度と実施経験の有無、子どもへの実施意欲

1) 認知度と経験率

人生儀礼では、子どものお祝いに関するもの(三日祝い、お七夜、お食い初め、初正月、初誕生、七五三、十三参り、年祝い)と、長寿を祝うもの(年祝い)について検討した。

子どものお祝いに関する儀礼について、認知度が最も高かったのは「七五三」であり(全体98.7%、男子97.2%、女子100%)、他と比べて有意な相違が見られた($p < 0.01$) (図4)。また、経験者の割合も著しく高かった(全体91.7%、男子88.7%、女子100%、 $p < 0.01$)。一方、「七五三」以外の子どものお祝いに関する人生儀礼は、認知度も経験率も低かった。認知度が最も低かったのは、男女とも「お七夜」であった(全体15.7%、男子8.3%、女子21.9%)。

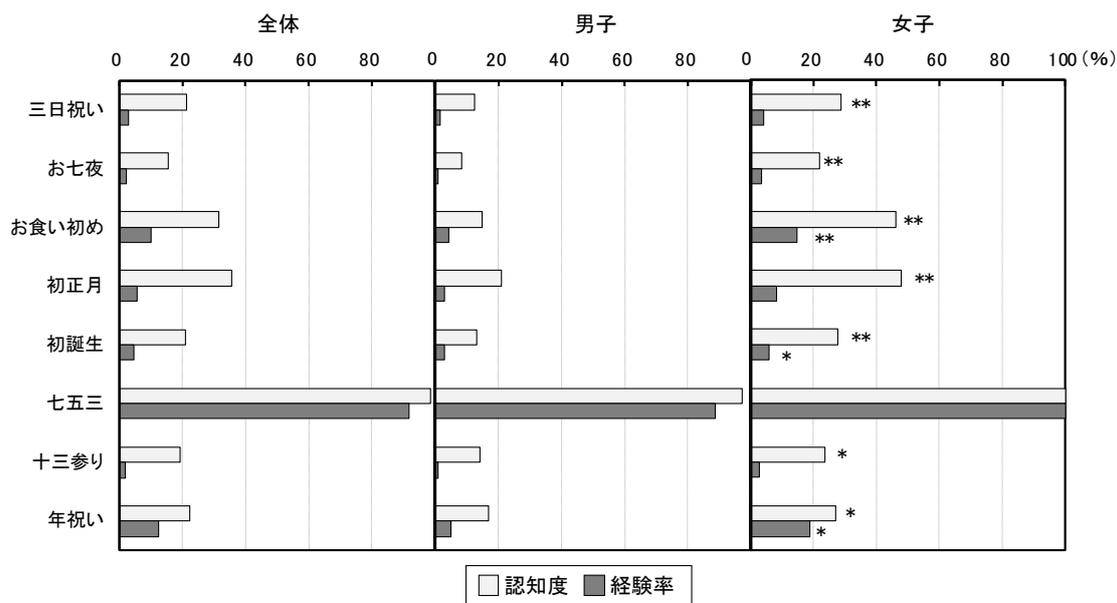


図4 大学生における人生儀礼の認知度と経験の有無

人生儀礼に対する認知度および経験の有無について調査した。
 男女間で有意差がある場合は、女子のバーの上に記した(χ^2 検定、* $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$)。

男女を比較すると、女子の方が有意に高く、男女間で相違が見られたが、女子においても認知度は21.9～47.9%と低かった。

経験率は認知度よりさらに低く(男子0.7～4.2%、女子3.0～14.8%)、七五三以外の子どものお祝いを経験した者の割合は著しく低かった。

同様の傾向が年祝いにも見られたことから、人生儀礼については、一部(七五三)を除いて、認知度・経験率ともに低いことが明らかとなった。

七五三の認知度・経験率が高かったのは、昨今の風潮として、男子は3歳と5歳、女子は3歳と7歳と2回経験すること、兄弟姉妹がいればそれを見聞きしていること、また、テレビなどのニュースでも取り上げられたり、街中で七五三の装いをした家族連れを見かけたりするなど、目にする機会が多いことなどが考えられる。

年祝いとは、還暦や米寿など、年齢の節目に応じて様々な呼び名が付けられている長寿の祝いである⁴⁾。調査対象者の大半が、年祝い自体が「分からない」と回答していた。そこで、理解度を図るために、認知群を対象として「年祝いの内容」を質問したところ、「還暦は61歳(数え年)」などの基本事項、祝いの意味や内容などを適切に答えられた人はおらず、内容を十分には理解していないことが明らかとなった。

鷺見¹⁰⁾は、学生を対象として通過儀礼の認知と経験について調査を行い、人生儀礼13項目の中で学生の認知が最も低かったのは「お七夜」(33.9%)、次いで「お食い初め」(28%)、「初誕生」(65.3%)であったと報告している。同様の報告を平島ら²³⁾も行っている。本研究でも、産育儀礼に対して認知度が低いことが明らかとなったが、その割合は鷺見¹⁰⁾や平島ら²³⁾と比べて著しく低かった。

本研究において、認知度と経験率の間に顕著な相違が見られた理由として、お七夜やお食い初め、初誕生などの儀礼は生後1歳までに行われるものであり、本人が意識していない状態で参

加するものであることから、自分自身が参加したかどうか覚えていないと考えられる。

後藤ら²⁴⁾は、近年、儀礼が簡素化・省略化されている傾向が見られることを指摘し、大学生と保護者を対象として調査を行い、「七五三」や「成人式」など自身が経験した儀礼や、「葬儀」や「法事」のように家族として参加するなど生活の中で経験する機会の多い儀礼はよく認知され経験されているが、経験がないと認知が低いことを報告している。

人生儀礼における経験率の低さは、自身が経験していない、経験していても記憶がない、こうしたことを家庭で話す機会がないということが考えられる。また、知識の無さは経験の無さだけでなく、興味・関心の低さも影響していると考えられる。つまり、これらの儀礼について知る機会がないことや、知ろうとする興味・関心・意欲が低いことが推測される。

昨今は少子化や核家族化が進み、親戚が集まってお祝いする機会が減少している。加えて、生活スタイルや価値観の変化により、儀礼を簡素化・省略化する家庭が増えているともいわれている²⁴⁾。家庭だけでなく、学校などの場で、これら人生儀礼を学ぶ機会を設けることにより、興味関心を喚起させ、内容の理解を深め、生活や人生のあり方に合わせながら、人生儀礼という伝統文化を継承していく必要があるといえる。

2) 将来、自分の子どもへの実施意欲、説明の可否、内容理解への意欲

「将来、自分の子どもに行いたいと思う人生儀礼」について調査した。

最も高かったのは「成人式」(全体 88.2%)、次いで「七五三」(全体 60.4%)と続き、いずれも過半数を超えていたが、それ以外の儀礼は 20%以下であった(図 5)。認知度や経験率が低い儀礼は、「自分の子どもに行いたい」とする割合も同様に低かった。

これら人生儀礼の内容に関する理解度を図るために、「内容を大体説明できるもの」を選択してもらった。最も高かったのは「七五三」(全体 63.6%、男子 56.3%、女子 69.8%)であった

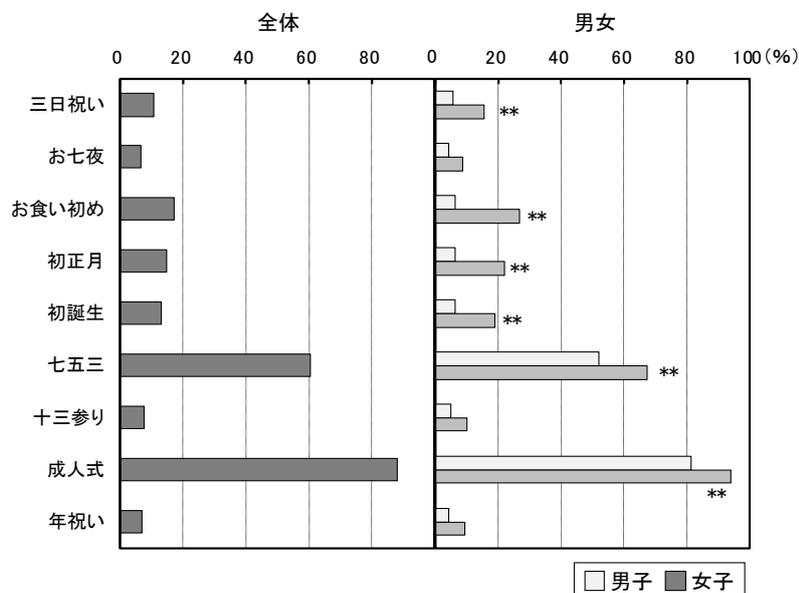


図5 将来、子どもに行いたい人生儀礼(複数回答)

「将来、自分の子どもに行いたい」人生儀礼を選択してもらった(複数回答)。男女間で有意差がある場合は、女子のバーの上に記した(χ^2 検定、* $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$)。

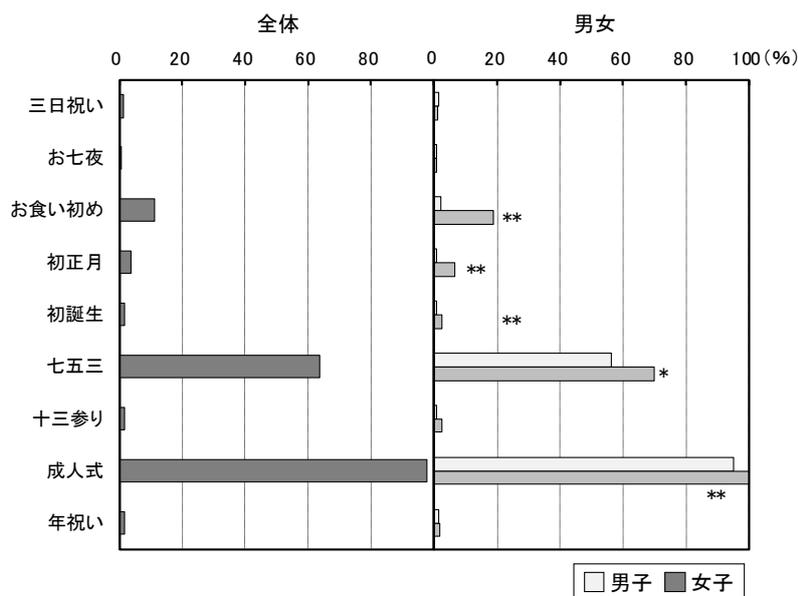


図6 「説明できる」人の割合(複数回答)

各人生儀礼について、「説明できるもの」を選択してもらった(複数回答)。男女間で有意差がある場合は、女子のバーの上に記した(χ^2 検定、* $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$)。

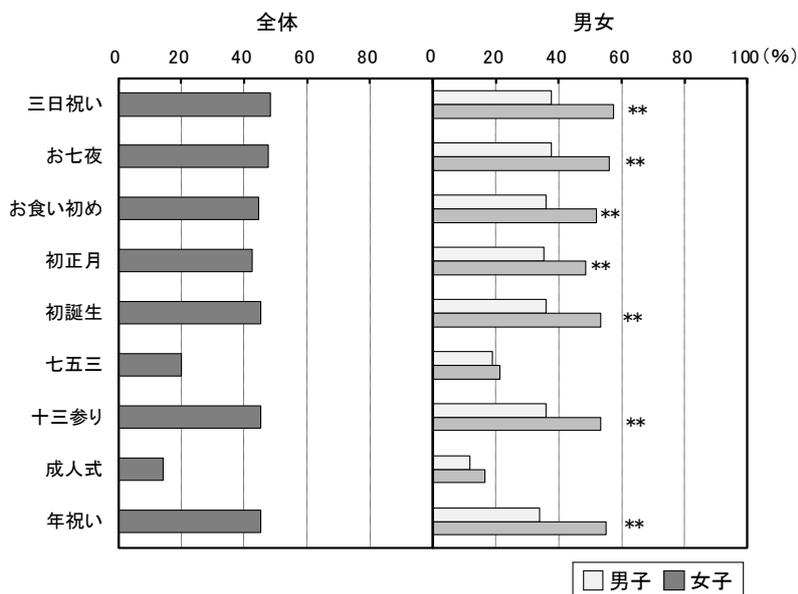


図7 「詳しく知りたい」人の割合(複数回答)

各人生儀礼について、「詳しく知りたいもの」を選択してもらった(複数回答)。男女間で有意差がある場合は、女子のバーの上に記した(χ^2 検定、* $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$)。

が、認知度よりも有意に低下した ($p < 0.01$) (図6)。次いで、「お食い初め」(全体 11.2%、男子 2.1%、女子 18.9%)であったが、割合は著しく低かった。他の産育儀礼についても同様であり、約3割が「聞いたことがある」と回答していたにもかかわらず、「説明できる」と答えたのはいずれも5%未満であり、認知度に比べて有意に低下した。

このことから、儀礼の名称を認知していても、それが実際どのようなものかという内容の理

解には至っていないことが示唆された。自分が知らないもの、経験したことがないものは、その謂れや内容が分からないままであることから、「将来、自分の子どもに実施したい」という意欲には繋がらないと考えられる。これは、人生儀礼の継承において危惧すべき状況といえる。儀礼の実施形態は、社会の変化や家族のあり方に応じて変化するものである。しかし、そこには、これら儀礼が家庭や地域で「継承」されている必要がある。人生儀礼について、由来や意味、背景、内容などを関連づけた知識と経験（祝う側・祝われる側）が必要といえる。

また、男女間で大きな相違が見られた。これは、女子は「将来、子どもを産むかもしれない」という母親（となる可能性がある者）としての視点があるためと考えられる。

人生儀礼について内容理解に対する意欲を図るために、「詳しく知りたいもの」を複数回答で選択してもらった。認知度・実施率の低い儀礼では「知りたい」と答える者の割合が高かった ($p < 0.01$) (図7)。一方、認知度や実施率などが高かった「七五三」や「成人式」の割合は低かった。これは、内容を既に十分理解しており、改めて学習する必要はないと考えているためと思われる。

少子化が叫ばれている現代社会において、男性・女性といった性別や、子どもを持つ・持たないに関わらず、こうした「子ども」の成長に関する祝いごとを通じて、子どもの成長を見守る大人としての視点を持つことが重要である。子どもの成長を祈願する風習を知り、社会全体で子どもを大事に育て見守っていく、という姿勢が求められているといえる。

(3) 代表的な「年中行事」に対する認知度と実施経験の有無

1) 認知度と経験率

年中行事では、「初詣、人日の節句（七草の節句）、節分、上巳の節句（桃の節句）、端午の節句、七夕の節句、重陽の節句（菊の節供）、中秋の名月」について、認知度と経験率を検討した。

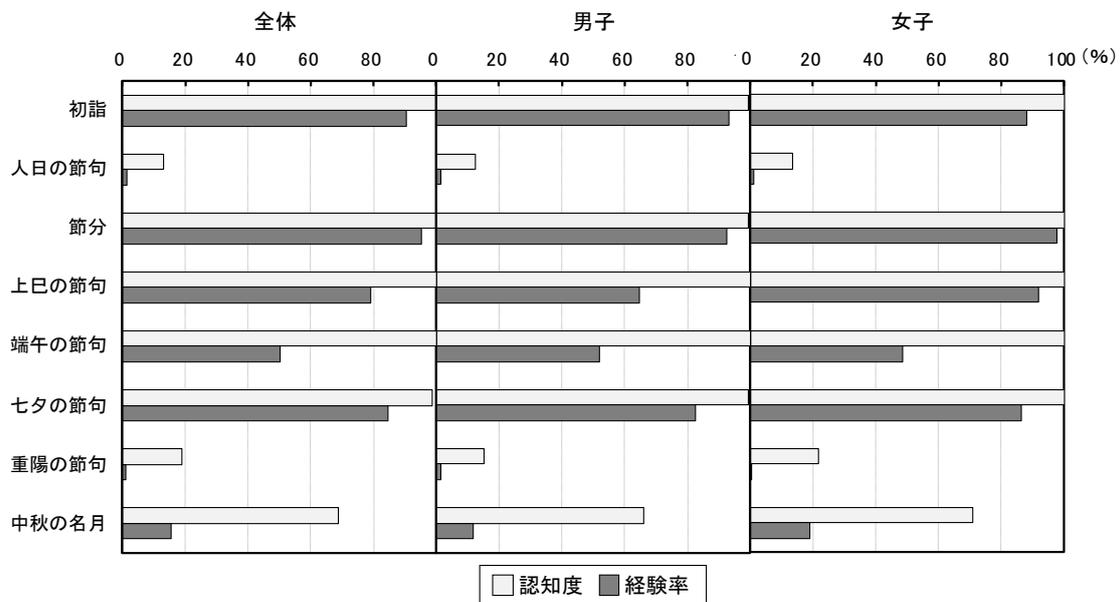


図8 大学生における年中行事の認知度と経験の有無

年中行事に対する認知度および実施経験の有無について調査した。実施経験は、一度でも経験したことがある場合は「実施経験あり」として分析した。男女間で有意差がある場合は、女子のバーの上に記した(χ^2 検定、* $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$)。

認知度が最も高かったのは「初詣」「節分」「七夕の節句」であり、大半が認知していた（図8）。次いで、「中秋の名月」は全体で約7割が認知しており、男女においても同様であった。また、これらについては、経験率も高かった。

これら行事の認知度・経験率が高かった理由として、家庭や学校行事など、普段の生活の中で見聞きしたり体験したりすることが多いためと考えられる。初詣では、正月（1月1日）に1年の健康と平和を願い、神社にお参りに行く⁴⁾。節分（立春の前日。2月3日頃）では、邪気を祓うために豆まきを行う。豆まきは「魔滅」「魔目」という縁起担ぎに由来する^{4) 25)}。七夕の節句（7月7日）では、願いを書いた短冊を笹の葉につるし、各地で祭りを行う⁴⁾。中秋の名月（9月中旬～下旬）は「お月見」をする日であると同時に、五穀豊穡を祝い、秋の収穫を感謝する「初穂祭」という農耕行事の日である⁴⁾。それぞれ、冬・春・夏・秋のイベントとして、現在でも盛んに行われている。

加えて、我が国の年中行事では、折々で食べ物が供せられることが多い⁴⁾。初詣は正月に行われるものであることからお節料理やお雑煮、節分は豆、七夕は素麺、中秋の名月では月見団子などであり、各行事の時期になるとスーパーなどにこれら食品が並ぶ。イベントとしての華やかさと実施のしやすさに行事食が結びついて、認知度と経験率が高かったと思われる。

一方、「人日の節句」や「重陽の節句」の認知度・経験率は、他行事に比べて有意に低かった（ $p < 0.01$ ）。認知度は、人日の節句は全体で13.1%、重陽の節句は18.8%、経験率はいずれも1%程度であり、顕著に低かった（ $p < 0.01$ ）。

重陽の節句については、学生の90%が「知らなかった」という驚見¹⁰⁾の報告と同様の結果が得られた。一方で、人日の節句については、学生の82%が「知っている」と答えたという報告²⁶⁾とは異なる結果となった。

人日の節句も重陽の節句も、五節句の一つである。人日の節句である1月7日には、七草（セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ（カブ）、スズシロ（大根））の入った粥を食べる習慣がある。冬でも芽を出す野草の強い生命力にあやかって、無病息災や五穀豊穡を祈願するものである⁴⁾。年中行事などの習慣は単なる迷信とされる風潮にあるが、理にかなったものもある。例えば、春の七草には栄養成分が含まれており、セリには鉄分、ハコベラにはタンパク質、スズナ・スズシロには消化を促す物質が含まれていることから、正月の暴飲暴食を休め、野菜が不足しがちな冬に滋養をつけるという意味もあったとされる⁴⁾。

重陽の節句（9月9日）は、古来、非常にめでたい日とされてきた²²⁾。3月や5月の節句は、元は物忌みの節句として本来は邪気祓いをするものであったが、重陽の節句は最初からお祝いの日とされてきた²²⁾。これは、奇数（中国の陰陽道で陽数のこと）が重なる節句の中で最大の数値「9」が重なることから「重陽」と呼ばれ、不老長寿を願う日となった²⁷⁾。菊の花には邪気を祓う力が宿っているとされるため、菊の花を浮かべた菊酒を飲んだり、菊を鑑賞したりすることは縁起が良いと喜ばれてきた。平安時代から宮中で行われた行事であり、江戸時代では庶民の間にも広まったが、明治時代になって新暦が採用されると、重陽の節句の日と菊の花の咲く時期がずれてきたこともあり、現在では一般家庭で祝うことがほとんどなくなったとされる⁴⁾。

認知度の低さの要因についてみると、人日の節句について、真部ら⁹⁾は、「七草粥」という語句に対して、若い年齢層においても高く認知されていると報告している。つまり、本研究では、「人日の節句」（七草の節句）が「七草粥の行事」と同一のものと認識されなかったことが、認

知度の低さにつながったとも考えられる。重陽の節句については、上述したように、新暦の9月9日には菊が入手しにくくなり、受け継ぐ風習が薄れてしまったこと、同じ9月の「敬老の日」が長寿の祝いとして受け継がれるようになったことなどが要因と考えられる。

我が国は、世界の中でも行事が多く、その行事の折々に食べ物が供せられることが多い⁴⁾。いずれも、健康に生きていくための先人の知恵である。食と行事の関係の中から、先人の精神や知恵を学んで今に活かすことが大切であるといえる。

2) 内容理解への意欲

各年中行事の内容理解に対する意欲を図るために、「詳しく知りたいもの」を複数回答で選択してもらった。

認知度や経験率の低い「人日の節句」「重陽の節句」については、「知りたい」と答える者の割合が高かった（人日の節句53.0%、重陽の節句47.3%）（図9）。また、認知度は高くても、経験率の低い「中秋の名月」が、これらに次いで「知りたい」と答える者の割合が高かった（39.0%）。認知度・経験率共に高かった「上巳の節句」と「端午の節句」を見ると、前者の方を「知りたい」とする割合が有意に高く、全体では上巳の節句35.1%、端午の節句21.1%であり、有意な相違が見られた（ $p < 0.01$ ）。「初詣」「節分」「七夕」は20%以下であった。

認知度や経験率が高い「初詣」「節分」「七夕」は、今までの経験から得られた知識があり、内容を十分理解していると考えているため、学習意欲が低いと思われる。一方、聞き馴染みがなく、経験率も低い「人日の節句」「重陽の節句」、および、経験率の低い「中秋の名月」に対してはより詳しく知りたいという意欲が高かったと推測される。

日本人は自然に親しみ、季節の移り変わりに従い、生活してきた。年中行事も他国に比べて多い。一年の始まりであるお正月の「お節料理」から始まり、大晦日の「年越し蕎麦」に至る

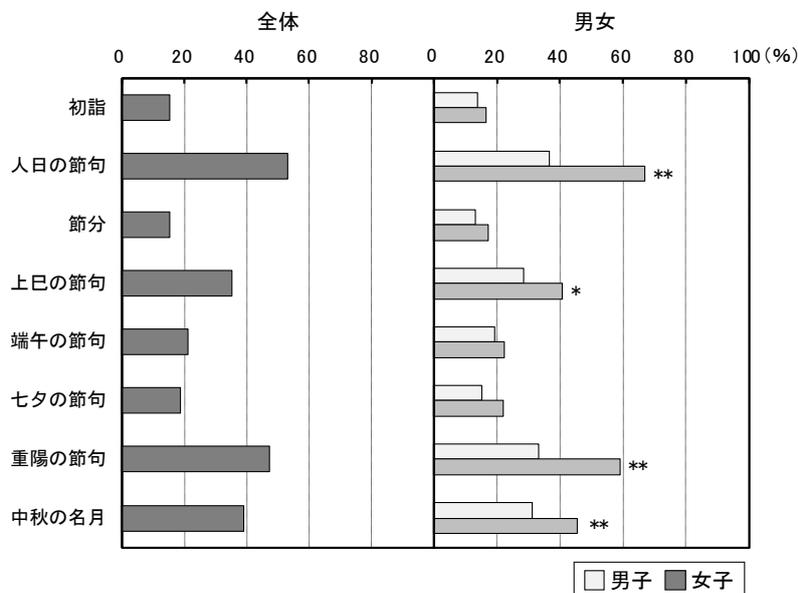


図9 「詳しく知りたい」人の割合(複数回答)

各年中行事について、「詳しく知りたいもの」を選択してもらった(複数回答)。男女間で有意差がある場合は、女子のバーの上に記した(χ^2 検定、* $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$)。

まで、年中行事と行事食が季節を彩っている。年中行事などで食されるものは、その地域に長く伝承して来たもの、四季折々の変化や旬を伝える食材を取り入れたものである。加えて、食材の中には科学的根拠のあるものもあり、長い歴史の中で先人の知恵と工夫が生かされたものである。一方、近年、年中行事の多くが形骸化しており、季節とともにあった年中行事の多くが顧みられなくなっている²⁷⁾。存続している年中行事もイベント化しており、若者世代においてはその謂れを知らない者も多い。また、行事食も省略されたり、外部化・中食化されたりするなど、季節に応じた行事を家庭内で伝承することが難しくなっている。このことから、教育現場において学習する機会を設け、その謂れや意味などの理解を深め、日常の中で実施できるように支援する必要があるといえる。

4. まとめ

本研究では、若者世代における人生儀礼および年中行事の認知度や経験率を検討した。その結果、人生儀礼においては、七五三が認知度や経験率が最も高く、大半の学生が認知・経験していた。一方で、その他の産育儀礼や年祝いについては、認知度・経験率が著しく低かった。年中行事においても、認知度や経験率に相違が見られ、「人日の節句」「重陽の節句」は他に比べて著しく低かった。これらの継承には、人生儀礼や年中行事に込められた願いや意味、歴史などを理解するとともに、実際に自分自身で実施していくことが重要と考えられる。

人生儀礼を行うことは、「自分が一人で生きてきたのではなく、多くの人に見守られてきた」と気付くきっかけになる²⁸⁾。年中行事を行うことは、季節の移り変わりや自然の豊かさ、先人の知恵と工夫を知るきっかけになる。変化の激しい社会において、自分の生活のあり方を見直すとともに、人生を通過する上での儀礼や四季折々の行事を、先人の知恵として受け入れ、生活や人生に少しずつでも生かしていくことが重要といえる。今後は、本研究の成果をもとに、教材開発を行い、伝統文化継承のための知識・技能の習得に繋げていきたい。

調査に快く協力いただいたS大学教育学部の学生の皆様にお礼を申し上げます。また、本研究の一部は令和5年度日本教育大学協会研究集会にて発表した。

参考文献

- 1) 農林水産省：「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されています、
<https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/ich/> (2013. 12. 4 取得)
- 2) 外務省：和紙：日本の手漉和紙技術」のユネスコ無形文化遺産代表一覧表への記載決定（外務大臣談話）、https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/danwa/page4_000824.html (2014. 11. 27 取得)
- 3) 外務省：「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」のユネスコ無形文化遺産保護条約「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」への登録についての審議結果
https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press6_000722.html (2020. 12. 17 取得)
- 4) 永田美穂：面白くてためになる！日本のしきたり，PHP 研究所，pp. 3-4, p. 7, pp. 38-39, p. 66, pp. 74-75, p. 105, pp. 124-125 (2012)
- 5) 高橋司：食で知ろう 季節の行事，長崎出版，p. 8, pp. 24-25, pp. 68-69, p. 90, p. 92, p. 116 (2008)
- 6) 日本風俗史学会 編：日本風俗史事典，弘文堂，p. 488, p. 623 (1994)

- 7) 農林水産省：IV. 『伝統文化』が息づく地域社会の維持・継承，
https://www.maff.go.jp/j/nousin/soutyo/binosato_gaidorain/pdf/068p089s4.pdf (2004)
(2023. 11. 20 取得)
- 8) 藤本啓二：伝統行事と地域活性化の課題～国東市岩戸寺修正鬼会を素材にして～ (第34回
地方自治研究全国集会「兵庫自治研」)，
https://www.jichiro.gr.jp/jichiken_kako/report/rep_hyogo34/08/0835_jre/index.htm (2012. 10. 20 取得)
- 9) 真部真里子，橋本慶子：年齢層による年中行事の認知と実施状況の相異，日本家政学会誌，
53(5)，407-415 (2002)
- 10) 鷺見裕子：行事食に関する意識と実態，高田短期大学紀要 30，141-150 (2012)
- 11) 文部科学省：小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編，東洋館出版社，p. 29 (2018)
- 12) 文部科学省：中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編，東山書房，pp. 29-30 (2018)
- 13) 文部科学省：高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総則編，東洋館出版社，pp. 33-
34 (2019)
- 14) 一般財団法人 京都宮廷文化研究所：狩衣について，<https://kyoto-kyuteibunka.or.jp/column/561/>
(2021. 12. 07 取得)
- 15) 八條忠基：素晴らしい装束の世界，誠文堂新光社，p. 63 (2005)
- 16) 一般財団法人 京都宮廷文化研究所：束帯-闕腋袍，<https://kyoto-kyuteibunka.or.jp/column/390/>
(2021.11.26 取得)
- 17) 着物レンタルリエ：着物の種類「水干(すいかん)」，
<https://kimono-rentalier.jp/column/kimono/suikantoha/> (2022. 11. 29 取得)
- 18) 池上良太：図解日本の装束，新紀元社，pp. 68-69 (2008)
- 19) 『現代用語の基礎知識』編集部 編著：日本のたしなみ帖 しきたり，自由国民社，pp. 94-95
(2015)
- 20) (株) 日本家政学会：家政学事典，朝倉書店，pp. 470-471 (1990)
- 21) 山上徹：食文化とおもてなし，学文社，p. 105，p. 118 (2012)
- 22) 主婦の友社 編：冠婚葬祭実用大事典，主婦の友社，pp. 178-179，pp. 182-185，pp. 188-189，
pp. 190-191，p. 246，p. 253 (2001)
- 23) 平島由絵，乾陽子，久保五月：学生の年中行事における認知度と喫食状況，鈴鹿短期大学
紀要，31，69-76 (2011)
- 24) 後藤月江，松下純子，金丸 芳，遠藤千鶴，長尾久美子，有内尚子，高橋啓子：徳島県にお
ける通過儀礼食の現状，日本調理科学会誌，46(6)，389-394 (2013)
- 25) 広田千悦子：くらしを楽しむ七十二候，アース・スターエンターテイメント，p. 110 (2003)
- 26) 佐藤幸子，山本千華，加藤里美，高梨萌，渡邊綾香：「行事食・儀礼食」調査研究の一考察，
戸板女子短期大学研究年報，53，1-13 (2010)
- 27) 小笠原敬承斎：暦のたしなみ，ワニブックス，pp. 81-82，pp. 103-104 (2013)
- 28) 永井とも子：儀礼は人生を拓く，ヒーロー出版，p. 176 (2009)